

あきらめてませんか？ 忘れ物

編集部

我が総合科学部では、周知のとおり広島大学における一般教育の講義が開かれている。そのため、当然他学部の校舎よりも学生の出入りは多く、激しく、その密度は非常に高い。「過密状態」にあると言っても過言ではないであろう。この問題については、前号の飛翔（No33）で指摘したばかりであるため、まだ記憶に新しい読者も多いかもしれない。「対人空間」が十分に保たれないと、人間は誰でもストレスを感じる。人が増える→人口密度が高くなる→イライラ・ストレスが増す。一体どうして、最大収容人員が500人の講義室において、700人以上もの学生の聴講を認めたりするのか、まあそこまで期待されていないのだろうし、あきらめられているのだろうと思うしかないのだが、ではそういう学生のイライラ・ストレスは何にはね返るだろうか？ 煙草の本数が増えるのか、出席率が低下するのか。ひょっとすると、落し物や忘れ物をする学生が増えるのではないだろうか。というとても強引な論法で、総合科学部内における落し物、忘れ物について調べてみた。

教室で、あるいはその周辺で、落したあるいは忘れたと思われる物を見つけた経験は、普通に学生している者ならば一度や二度はあるだろう。また、逆に物を忘れて、落したりといった経験も大部分の者はあるのではないだろうか。その時、あなたはその目の前にある物、あるいは目の前から消えた物に対してどう対処したか。忘れ物に対しては、その場所に「そのままの」状態でそっとしておく場合が多いのではないか。「忘れた」者が「思い出し」て、取りに戻る場合を想定すると、それが一番親切であるかもしれない。しかし、落し物に対してはそういうわけにはいかない。落し主が、落した場所と時間を確定することは非常に困難であるし、忘れ物よりも人目に触れて場所を移動したりする場合が多いと考えられるからである。

総合科学部厚生補導係に届けられる拾得物は、学生のほか、教室を見回った職員によって持ち込まれる場合もある。冬場は、やはり季節物のマフラー、手袋などが多く、今年は特に暖冬傾向が強かったことが影響したのか、それらが多かったらしい。集まっ

てきた拾得物は窓口の前の棚に保管されることになるのだが、その期間は6ヶ月と2週間、と決められている。また、届けられるとすぐに掲示板に貼り出されるのであるが、その期間も6日間と決められている。（一体どのような基準で決められているのだろうか？）半数は、この掲示を見て引き取り手が現れるらしいが、残りは保管され続け、期限が切れると処分される。その方法は焼却。（もったいなあ・・・）



しかし、当然ながら例外もある。現金は金庫で保管され、1週間以内に落し主が現れない場合は警察へ届けられる。何万という大金が届けられる場合もあるらしい。また、カサや辞書は保管期限が過ぎると公共物となり、必要な時に借りることが可能になる。しかし、予想どおり「誰も借りには来ませんけど」という話である。

季節物を除けば、鍵や手帳といった「定番」ものの落し物・忘れ物が多い。変わり種ではクリーニング上がりの服や、ポット、弁当箱、あめ玉のいっぱい入った袋などもあるらしい。また、拾得物を引き取る場合は、落した時期と場所とを明確にし、住所、氏名、TEL番号を届ければ返してもらえる。その場合、拾い主の住所とTEL番号も控えてあるため、TELや手紙での礼を勧められるが、それは強制ではない。

実際に拾得物の保管されている棚を見ると、その

量の多さに驚くし、その中でも失くしたという事実
に到底無関心ではられないような類のものには目
を見張ってしまった。この世の中に物と金があふ
れている時代にあっては、引き取りに来る者が減
少傾向にあると聞いても、それも仕方ないことだ
ろうと納得してしまう。しかし、厚生補導係まで
探しに来る者ほど、見つけることが難しいとい
うことも事実である。特に現金は、拾い主にし
ても、落とし主以上に魅力的な「見つけ物」で
ある。

あきらめないで厚生補導係をのぞいてみて下
さい。という職員の方のメッセージと共に、「過
密状態の総科」への怒りを残しつつ THE END。

(文責 鈴木 美緒)



村上春樹が訳したレイモンド・カーヴァーのある
短編の中に、こういう挿話がとり入れられている。
ある老婦人が美術館の化粧室で、小切手と現金120
ドル、それにIDカードの入った大切なパースを忘
れてしまう。帰宅してそのことに気付くやいなや、
身なりの良い白髪の婦人がそのパースを届けにや
ってくる。パースの中には現金以外の全てがそのま
まで、老婦人はほっとする。談笑ののち、届け主
である婦人がいとまごいをして席を立つと、突然
彼女はカウチに倒れ込んで死んでしまう。老婦人
は驚きおそれながらも、死んだ婦人の身元を知ろ
うと彼女のパースを開けた。老婦人がそこに最初
に見たものは、まだペーパーリップにはさまった
ままの、自分のものである120ドルだった。

「悪銭身につかず」と言い切ってしまうには余
りにも哀れであるが、人間である以上どうしても
「欲」を立ち切ることは難しい。考えてみれば、
失くした物を取り戻したいと思う、その感情もあ
たり前の「欲」であるのではないか。またそれが
なければ、人間やっていくのもおもしろくない。
みなさん、落とし物や忘れ物を見つけたら、厚
生補導係へ届けましょう。もし自分が落したり、
忘れたりしたときには、

特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース (指導教官)	氏 名	論 文 題 目 名
地域文化		
(立川)	阿部 由幸	魔女研究
(金田)	佐伯 康	リヒャルト・ワーグナー研究
(久野)	新田 勝弥	ルドルフ・シュタイナー研究
(陣崎)	伊藤 俊巳	Waldenと“Civil Disobedience” —ヘンリー・ソローの「楽園」の思想
(川邊)	柿本 雅之	東欧系ユダヤ移民と Reform Judaism 運動
(櫻原)	梶山 雅史	中島敏論—「李陵」を中心として—
(金田)	田中 健	論理学研究第II巻第1研究についての考察
(久野)	古川 哲史	日本—アフリカ交渉史に関する考察—戦前篇—
(朝倉)	有好 恵美	勅撰集にみられる「音」について—素材からの検討—
(川邊)	池本 恵子	「アメリカにおける女性解放運動と女性犯罪の増加との関わり」
(永尾)	磯辺 悌志	比喩の研究—川端 康成の作品を対象として—
(川邊)	岩浅 暁美	離婚—アメリカにおける家族変化—
(久野)	宇都宮 文恵	「神話における死後の世界の研究」
(久野)	岡本 妃加	星の神話・伝説
(陣崎)	桂 尚子	Main Street “The Village Virus” への諷刺
(村上)	河野 淳	瀬戸内臨海都市の海域への拡大
(村上)	下松 慈明	広島市の都市周辺部における住宅地化
(山下)	品川 佳代	インドネシアにおける国民統合—文化人類学的アプローチ—
(友田)	清水 裕子	イギリス商業史—冒険商人組合に関する—考察—
(志邨)	祐宗 真美	マーチン・ルーサー・キング二世の非暴力哲学とその実践について
(村上)	戸上 武	都市内部構造と都市交通に関する考察—北九州市を事例として—
(志邨)	土居 容子	世紀転換期アメリカにおける教育と移民について—公立学校を中心に—
(米田)	二宮 英幸	イギリスにおけるニュータウンの発展とその背景
(櫻原)	蓮井 知子	現代日本児童文学研究—松谷みよ子の幼年童話を中心に—
(金田)	馬場 晶子	Georg Simmel の風景論に対する考察
(金田)	福居 真介	映画論—映画的表現技術とニュー・ハリウッド派についての考察—
(永尾)	福田 智恵	狂言における敬語表現の研究—脇狂言を中心に—

(川邊)	藤 惠 千 華 子	FANTASY IN AMERIKA:WALT DISNEY AS COMMERCIAL ARTIST (アメリカのファンタジー:コマーシャルアーティストとしてのウォルト・ディズニー)
(古東)	藤 原 恒	メルロ＝ポンティの初期言語論研究
(金田)	古 谷 可 由	初期ニーチェの芸術思想
(金田)	本 田 か お り	Bauhaus—W. グロピウスの建築造形理念—
(久野)	松 井 雅 広	教会堂建築—その発展と西欧世界—
(川邊)	宮 崎 智 大	アメリカのコンピュータ産業
(久野)	村 上 範 子	古代宗教と神話
(古東)	守 田 靖	了解と脱自の存在論
(志邨)	山 口 美 佳	ニュー・フェミニズム—女性の意識革命の背景—
(志邨)	山 崎 利 恵	ニューヨーク・ニュージャージー・ポートオーソリティに関する研究
(楠瀬)	山 田 敦	日本植民地時代における台湾の鉄道の研究—縦貫鉄道を中心にして—
(陣崎)	山 田 芳 彦	無垢と偽善の相剋—マーク・トウェインとJ.D.サリンジャーの場合—
(小林)	山 本 敬 子	復旦大学校史の研究—抗日、解放前後期における問題を中心—
(陣崎)	吉 田 徹	Richard Wright にみる抗議
社会文化		
(日南田)	高 橋 信 哉	言葉・商品・自分—「読む」ことについて—
(木本)	石 井 陽 子	制御技術におけるコンピュータの史的役割
(伊藤)	石 崎 満	土地信託制度の意義と問題点
(清水)	宇 田 川 学	妖術の人類学
(高崎)	甲 斐 し の ぶ	経済側面から見た老後の生活の考察
(山田)	風 間 直 毅	平和の挑戦—戦争と平和に関する司牧教書について
(山田)	河 野 隆 行	日本企業のSDI参加に関する一考察
(岩田)	向 当 剛 治	ソ連の対SALT—I政策—政策決定論による一考察—
(舟場)	後 藤 和 美	地域活性化政策としての「一村一品運動」—内発的地域振興政策の有効性検証—
(山田)	角 繁 裕	当面の危機委員会
(清水)	高 橋 誠 司	王権の考察
(間田)	田 中 誠	広島市放置二輪車条例の分析—政策の公益適合性の観点から—
(舟場)	谷 口 庄 一 郎	企業誘致と地域間所得格差の拡大
(清水)	中 村 正 昭	青鞥とその周辺—現在における女性学的観点との比較考察—
(舟場)	畠 山 博 雅	地価高騰と広島の地価問題
(鯨坂)	濱 本 ひ かる	女性の自立—市場と家庭の間で—
(志村)	藤 井 正 直	海外直接投資に関する一考察
(西澤)	溝 上 起 雄	アジア太平洋地域における貿易構造の変化について
(西澤)	村 田 順 子	広島県内企業の海外進出
(志村)	森 分 幸 子	経済環境変化と中小企業の対応—異業種交流活動を中心として—
(志村)	吉 田 武 彦	マイクロ・エレクトロニクスによる技術革新が雇用、 特に中高年労働者と女子労働者に与える影響について
(木本)	吉 田 雄 一 郎	日本の原子力産業の歴史的展開

(西澤)	吉松 剛志	アフリカ食糧危機の社会・経済的一考察
情報行動科学		
(磯道)	茂筑 裕一郎	導出の効率化のための学習に関する研究
(上里)	石飛 由美	セルフ・エフィカシイの実験的研究—虚偽検出場面におけるセルフ・エフィカシイの機能—
(堀忠)	大塚 洋	大脳半球機能差に及ぼす短周期生物リズムの影響
(磯道)	相川 忠雄	3値PROLOGのインタープリタ設計
(前田)	青木 亮	D/A交換における一考察
(前田)	井上 由紀子	グラフを描くソフトに関する研究
(水上)	植田 栄治	プロダクション・システムにおけるパターン照合の効率化に関する研究
(渡辺)	大宅 芳枝	軟寒天培養下におけるニワトリ胚強膜線維芽細胞の増殖と分化の調節
(内山)	小田 司	ヒト前骨髄性白血病細胞における遺伝子発現
(前田)	柏原 和行	フロッピーディスクにおけるクラスタの不連続性について
(天野)	河村 佳徳	肝細胞の分化形質発現——成体肝細胞特異抗原の検索と解析
(上領)	菅 享次	酵母ペルオキシソーム遺伝子群の発現調節に関する研究
(上里)	幸田 尚美	心拍数制御に関する実験的研究
(小野)	重平 和孝	代数構造に関する決定問題について——量化記号の除去を中心として——
(宗岡)	末松 浩嗣	ユムシ <i>Urechis unicinctus</i> の体壁筋の収縮に及ぼすカテコールアミン類とその関連物質の影響
(杉本)	妹尾 達也	フローティングの効果についての精神生理学的研究
(磯道)	田村 秀二	劣化画像の復元問題
(水上)	坪田 留美	誘導微分ゲーム問題に関する研究
(杉本)	野手 美希子	オペラント行動と定位反応における海馬Q波の研究
(杉本)	橋岡 孝	ラットの回避学習課題における扁桃体および中隔損傷の視覚誘発電位に及ぼす効果
(藤原)	林 巖	方言が第一印象の形成に及ぼす効果に関する実験的研究
(生和)	福田 毅	不安に関する実験的研究—Stimulus x Situation Interaction Modelの検討—
(堀忠)	森川 俊雄	刺激欠乏環境下における覚醒水準の変動に関する精神生理学的研究
環境科学		
(堀越)	保科 亨	山林火災跡地における植物根圏の微生物について
(栃木)	豊永 久生	長野市地附山地すべりに関する調査とその考察
(瀬川)	藤島 稔	ツバキ属ツバキ節複合体の数量比較的研究
(武森)	小川 紀之	副腎ミクロソームのチトクロムP-450 _{17α} 、lyaseの反応機構
(藤井)	折茂 慎一	高温超伝導物質の水素化にともなう物性変化
(於保)	河本 直美	岡山県鏡野町付近における弱変成岩の地質構造
(江口)	菊池 慎一	SL(2, R)の表現について
(坪田)	菊原 得仁	沿岸海水中の重金属
(檜原)	岸野 敬子	NMR圧力ゲージによるクランプ方式高圧発生容器内の圧力測定
(堀忠)	櫻井 芳史	山腹斜面における崩壊地形に関する研究
(水本)	杉山 忠生	リーマン面上の偏微分方程式の数値解法

(栃木)	鈴木	滋	高知県大豊町和田地区における地滑り調査とその考察
(根平)	染矢	貴	植生ユニットからみた土地利用の比較
(倉石)	高橋	薫子	内性オーキシソ・アブシジン酸含量とウキクサ開花との関係
(大林)	塚本	英明	$(La_{1-x}Sr_x)_2Ni_yCu_{1-y}O_4$ の超伝導と赤外吸収
(藤井)	手島	文雄	三元系Ce化合物の磁性と電気抵抗
(岡野)	豊田	剛司	エチオピア産ニガキ科植物中の抗がん作用物質
(福岡)	鳥居	淳	岐阜県各務原市内外団地における都市気候学的研究
(田代)	中川	泰	ピアノカーブの研究
(堀越)	原	章予	感潮域底泥中の微生物バイオマス測定を試み
(松田)	平井	宏治	素粒子共鳴の意味についての研究
(林)	平野	茂雄	植物及び動物中のゲルマニウム含有量について
(水本)	正岡	秀史	リーマン面上の固有値問題の数値解法
(福岡)	南	利幸	広島湾の海陸風の構造と環境に及ぼす影響
(内海)	三村	浩司	低温度星の分光学的研究
(大林)	山下	浩之	$(La_{1-x}Sr_x)_2(Cu_{1-y}Zn_y)O_4$ の超伝導と赤外吸収
(堀 啓)	山田	充	秋吉台の石灰洞に関する地形学的研究
(山下)	山本	和代	有機分子固体膜の光電導
(倉石)	渡辺	左知子	矮性及び正常オオムギ子葉鞘のインドール酢酸生合成経路の検討
(根平)	和田	秀次	温帯林構成木本植物の生長様式と環境

II 修士論文

研究科 (指導教育)	氏名	論文題目名
地域研究		
(永尾)	高 仁海	夏目漱石論—後期三部作に見られる形容語彙を中心として—
(佐竹 明)	長松 孝明	南ドイツ、ヴァルツコートにおける宗教改革—B. フープマイアを中心として—
社会科学		
(大石)	赤見 友子	イギリス「経済衰退」とジェントルマンイディアール、1870年から1930年を中心に—マーティン J. ウィーナー批判—
(久野)	神野 滋	ハイデッガーの《Gewissen》
(佐竹 明)	佐藤 規子	近代イランにおける宗教と政治—タバコ・ボイコット運動(1891—92)を中心として—
(佐藤)	高崎 雅人	カチン丘陵地帯における社会的有幅振動の諸相
(山田)	山田 康博	大量報復戦略の形成
生物圏科学		
(堀 啓)	荒川 達彦	与論島のカルスト地形と第四紀の環境変遷
(堀 啓)	和泉 洋太	水害からみた沖積低地の土地利用分類に関する研究
(好村)	上野 聡	生体膜の相転移の回折学的研究
(大林)	宇都宮 吉治	古典希ガス流体のラマン散乱の研究
(坪田)	倉本 健一	沿岸海域における重金属の沈降・堆積過程

(福岡)	小林 正興	都市気候に及ぼす水面の影響の熱収支シミュレーションによる解析
(舟場)	清水 多佳子	広島都市圏の空間構造と高齢者の社会環境に関する研究
(佐田)	高田 善雄	岡山県後月郡芳井町付近の中・古生層の層位と構造に関する研究
(杉本)	林 光緒	自発的睡眠の消長に及ぼす恒暗・脱同調環境の影響
(栃木)	原 龍一	佐世保市小舟地区地すべりの特性とその考察
(藤井)	福庭 一志	$Zr(Fe_{1-x}Mx)_2Hy$ (M=Ti, V, Cr) の水素吸蔵特性とその物性
(大林)	福本 彰	高温超伝導物質 $(La_{1-x}Mx)_2CuO_4$ 系の研究
(渡部)	松田 直志	金属超微粒子の理論
(山下)	松林 達朗	ポルフィリン分子固体薄膜の電気伝導性の制御
(好村)	宮崎 年雄	液晶の回析学的研究
(坪田)	山口 俊哉	内湾の海洋物理的特性(虫明湾の海況とセイシュに伴う瀬溝水道の流れの特性)
(渡部)	山本 明典	液体金属表面の理論
(高橋)	山本 哲也	大形土壌動物が森林の物質循環に及ぼす影響についての実験的解析
(上里)	米村 あゆみ	幼児自閉症にみられる自己刺激行動と覚醒水準の関係についての研究
(武森)	生城 真一	アルドステロン生合成関与の P-450 _{11β} -プロテオリポソームの調製とその性質
(重中)	池川 直	Studies on the Axopodial cytoskeleton of a Heliozoan <i>Echinospaerium akamae</i> (太陽虫 <i>Echinospaerium akamae</i> の軸足内細胞骨格に関する研究)
(豊島)	川口 博	光誘導による光合成光化学反応中心複合体形成機構
(倉石)	小久保 亮	オオムギ脆稈突然変異種の細胞壁解析
(天野)	小原 佐和子	変態期におけるアフリカツメガエル肝細胞のヴィテロジェニン合成能獲得に対する甲状腺ホルモンの役割について
(上領)	逆瀬 川裕二	酵母ペルオキシソーム系蛋白質の輸送に関する研究
(天野)	田畑 純	アフリカツメガエル初期胚発生における母性因子の研究:モノクローナル抗体作製による探索と解析
(瀬川)	中川 司	山林火災跡地の無機能窒素と可給態窒素の動態
(渡辺)	二村 正之	無タンパク培養条件下におけるニワトリ胚強膜線維芽細胞および胚体線維芽細胞の形態とその増殖様式
(宗岡)	平田 たつみ	軟体動物神経ペプチドの構造決定と生物活性
(宗岡)	藤本 成明	軟体動物平滑筋の弛緩におけるcAMPの役割
(豊島)	本川 修	P S II 光化学反応中心複合体の解体と再編成
(小南)	森宗 令子	モルモット副腎 P-450 _{17α} , lyase の活性調節機構

就 職 委 員 会 報 告

就職委員会

昭和62年度の総科生の就職活動は、就職協定の再度の様変わりのせいか早期化の傾向があった。そして、活動を終って学生諸君が異口同音に訴えたことは、早い時期での活動の有利性であった。

以下、今回は社会文化コースを例にとって総合科学部の就職のアウトラインを紹介してみたい。

社会文化コース59年度生の就職状況

社会文化コース就職委員 西澤信善

社文59年度生の就職状況は以下のとおりである。社文（現在、社会科学コース）59年度生は全員で27名である。そのうち留年見込者5名、進学予定者3名がおり就職希望者は20名となる。すなわち、社文所属者の約7割である。さて、就職の状況はどうであろうか。実際に就職が内定した者は19名で未定者は1名である。内定者の進路を公務・教育と民間企業にわけると前者が5名、後者が14名となっている。公務員は大体地方公務員である。これは例年の傾向のようであるが中央官庁は少ない。後者の試験はかなり難しいようでそれにパスするためには十分な準備が必要であろう。教職は2名であるが、二人とも高校の教員でそれぞれ社会と国語の担当である。次に民間企業の就職内定状況をみよう。社文の顕著な特徴として民間内定者14名中12名が第3次産業を選び、製造業はわずか2名にしか過ぎなかったことを指摘することができる。前者の具体的な業種は新聞、放送、出版、広告、商社、旅行それに金融など多岐にわたっており、いわゆるサービス産業が多い。もちろんさき上げた公務・教員は第3次産業に分類されるからそれを考慮すると、就職内定者19名中17名までが第3次産業に就職することになる。近年、重化学工業中心であった日本の産業構造は休

息にサービス化、ソフト化を進めつつあるが、社文の今年の就職状況はまさしくそうした動向を反映しているとみることができる。むしろそうした傾向を先取りした観さえる。

以上が大体の就職状況であるが、例年の傾向と大きくは変わっていない。ここで就職に関して社文の学生A君が語っていた一つのエピソードに触れておこう。A君の友人が東京のある有名私大に進学したのであるが、彼の場合就職の時期になるとその大学先輩が多数勧誘に来て優良企業のどこでも選べるといふ恵まれた状況であったそうである。それに比べるとA君の場合、先輩の引きもなく実力で就職戦線を勝ち抜かなければならなかった。確かに総合科学部ができて10年ちょっと、卒業生も少なく、しかも彼らはまだ中間管理職にも届いていない。コネがはばをきかず就職戦線にあっては、こういう状況は何かと不利であることは認めなくてはならない。こうした点を考慮すれば今年の就職戦線はかなりの難関を突破した者が数名おり、まずまずの善戦と評価してよいのではないか。

要は日頃から実力を貯え、パイオニアとして各分野を開拓していくはかないのである。各界の第一線で活躍する有為な人材を送り出すことは教師たる者の願いである。

昭和62年度卒業予定者進路状況

(63. 3. 11現在)

区 分 \ コース	地域文化	社会文化	情報行 動科 学	環境科学	計
卒業予定者数	(18) 40	(5) 22	(6) 24	(5) 28	(34) 114
進学希望	7	1	(1) 9	14	(1) 31
公務員	2	(1) 3	(2) 2	1	(3) 8
教員	(1) 2	(1) 2	1	1	(2) 6
企業	(17) 28	(2) 14	(3) 12	(5) 10	(27) 64
自営	0	—	—	0	0
無職	1	(1) 2	0	2	(1) 5

() は女子で内数

就 職 内 定 企 業 名

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
鹿島建設 長谷川工務店 中電プラント リクルートコスモス 栄泉不動産 タカキペーカリー(2) 丸大食品 ノエビア 河村電器産業 マツダ(3) 段谷産業 熊平製作所 山一証券 国際証券 第一証券 福武書店(2) トッパンアイデアセンター 日本放送協会 中国放送 中国新聞社 全日本空輸 近畿日本ツーリスト 神戸日本電気ソフトウエア 四国日本電気ソフトウエア	鹿島建設 バイオニア ベスト電器 福井銀行 KTC中央出版 総合オリコミ社 日本放送協会 中国新聞社 広島エフエム放送 近畿日本ツーリスト 阪急交通社 アイネス インテック 生駒商事	協和電設 ヒゲタ醤油 日本電気 松下電器産業 シャープ マツダ ローランド トッパンアイデアセンター 日本電信電話 中国電力 中国日本電気ソフトウエア 日本ユニバック	日立化成テクノプラント 日本チバガイギー 医学生物学研究所 日本生命保険 中国日本電気ソフトウエア 日本電気技術情報システム開発 アジア航測 日本生活協同組合連合会 医療法人早蕨会山本病院 Q U I C K

就 職 内 定 公 務 員 ・ 教 員 名

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
(公務員) 広島県 広島市 (教員) 広島県(高・英) 山口県(高・英)	(公務員) 横浜税関(国家II種) 大分県 広島市 (教員) 愛媛県(高・国) 福岡県(高・社)	(公務員) 神戸家庭裁判所(調査官補) 広島大学工学部 (教員) 山口県(高・数)	(公務員) 広島県 (教員) 熊本県(高・数)

大 学 院 修 了 予 定 者 就 職 内 定 先 調

(企業) 日本工営 三菱製紙 セントラル硝子 ダイセル化学工業 帝人 戸田工業	マツダ 生化学工業 松下電器産業 沖電気工業 島津製作所 広島ホームテレビ 地域開発コンサルタンツ	(公務員) 防衛庁技術研究所 大阪府 広島県 広島市 香川県	(教員) 神奈川県(高・国) 作陽音楽大学 尾道短期大学
---	---	---	---------------------------------------

就 職 体 験 記

就職委員会

趣味と仕事

情報Ⅲ群 妹尾達也

「趣味と仕事」ということについて考え始めたのはいつごろからだろうか。とにかく小さい頃から多趣味だった私は、学校の勉強は勉強として、暇があれば自分の好きなことに没頭していた。高校に入ってから「本分」である勉強がますます大変になっていったが、同時に「趣味」の方も音楽づくりのほかに絞られていき、「本分」と同じくらいに「趣味」を大切にするようになった。

大学に入ってから、自分の時間が多くとれたので、それまでよりは趣味の方がずいぶん充実していった。手軽な電子楽器を使っていろいろといたずらをしていたのであるが、これはもう一生の趣味としてやっていくことになりそうである。

さて、それでは大学卒業後の本分として何を選ぶか。企業に入るなら、研究・開発部門で働きたかった。しかしもともと文系の自分が、学部卒で何の研究・開発をするのか。企業に対して何をPRできるのか。もし専攻の心理学を生かすのなら、大学院に進んだ方がいいのか。周囲の人間が就職活動に入っていく中で、私はどこの企業も採ってくれないような妄想に悩んでいた。が、とにかく就職の情報を得ようと、6月、某研究所に就職された先輩を訪ねて上京し、そこでの仕事内容などについて、いろいろお話をうかがった。しかしその話を聞くにつけ、その会社でやっていく自信は持てなかったし、ますます就職のための勉強の必要性を感じたのである。

そんな中、上京ついでにある楽器会社の入社説明会にも寄ってきた。偶然にも技術系の説明会で、その後いきなり面接があったのには面食らった。ただ、仕事の話として電子楽器の技術に関する考えなどを聞かれたときは、自分の「趣味」を最大限に生かして言いたい放題言ってきた。ところが以外にも良い感触を得てきたのである。楽器会社だから当然だろうと思ったが、このときから自分の「本分」としての仕事に、「趣味」を生かさないと考え始めたのである。

その後は、楽器会社に絞って情報を集めた。ある教官の紹介で、某大手楽器会社の人と個人的に会う機会を得ることもできた。大企業の安定性には魅力を感じたが、結局この紹介は断わって先ほどの会社に決めた。教官や話をしてくれた人には大変申し訳なく思っているが、私はやはり研究・開発職に就きたかった。

「本分」に「趣味」を生かすと、どんなことになるのか、今から楽しみなところである。

22歳の出発点

地域文化アジア研究 山本敬子

「就職」という言葉に対し、漠然としてはいるが大きな不安を抱いていた、最級学年の大学生の1人ではあった。

実際に就職活動を開始してみて、話に聞いていたことが現実問題として私の前に現れてきた。まず第一に、男女差である。6・7月頃に会社訪問を行った情報処理関係の会社は、男性と同じように説明会に出席し、試験を受け、面接を受けた。だが、女性の採用人数は決して多くはないらしい。いや、ほとんど採用しないからこそ、区別して面接をするようなこともしないのだろう。これに対し、8・9月頃会社訪問を行った流通・金融関係の会社は対照的だった。会社説明会は女性のみを集めて行われた。それ以後の試験、面接でも、男性と顔を合わせることは全くなかった。仕事内容も男性と女性とでは全く違うらしい。女性を一定量採用するところでは、女性は男性と別扱いであり、単なる短大の延長に過ぎないのだ、というのが、私の実感であった。無論世の中には無数の会社がある。私の経験はほんの1部ではあろう。しかし、いつまでも理想論を言っている程、世の中は甘くないのだろうと思っている。

今の私は自宅から大学に通っている広島の間人であるため、就職先についてはとりたてて悩むこともなく広島に決めていた。そんな私も1度だけ、大阪へ会社訪問の足を延ばした。いわゆる地方から、関東・関西のような中央へ就職することは、女性にとっては容易なことではないらしい。会社の方では歓迎していないのだということを感じとって、私は大阪からひきあげてきた。それっきり、広島以外で就職活動することもなく、9月にはいり初めて会社訪問をした証券会社に無事内定をもらい、4月からはその広島支店で勤務する予定である。

受験、就職、結婚が、男性にとって本気になって力を発揮する時なのだそうだが、何故ならそれらが男性にとって、人生の全てを決めてしまうからなのだろう。その点女性にとって、就職がこれからの人生のほとんど全てを決めてしまうかどうかは、疑問である。就職や仕事は人生の中で1つの通過点に過ぎない。5年後、10年後の私が何をしているか、そんなことを考える、今日、この頃である。

岡本先生の思い出

— 中国を共に旅して —

小林文男

長かった道程

「来年はかならず中国へ行きたい。よろしく頼むね」——岡本先生からそう言われたのは、たしか上杉文世教授が大著『光のイメージ』を上梓され、その出版祝賀パーティの席上においてであったから、昭和60年9月28日の夜だったと記憶する。私は思わず、「本当ですか。今度こそ間違いありませんね」と念を押した。先生は「いや間違いはない。腹を決めたよ」と笑われ、二人で乾杯した。

私が念を押したのには、理由がある。それというのは、それまでに二度、先生は中国訪問を希望され、私も万端手筈をととのえていたのだが、そのつど予期せぬ重要なお仕事が入って計画倒れになっていたからである。学部長職が想像を絶する激務であることは、私とて知らぬわけではない。しかも、社会科学部研究科の設立に奔走努力されていたあの頃の先生には、予定はつねに「仮定」でしかなく、個人の願望など「夢」に終るしかない明け暮れであったのであろう。それだけに、懸案が片付いたいま、「今度こそは」と決意されたのであった。それほど先生の中国への関心は以前から強く、「古いものを見たい」というのが、先生の口ぐせであった。

そして、その日からちょうど一年目、正確には昭和61年9月25日、先生はついに北京行きの機上の人となった。

先生の中国訪問に当って私が立てたスケジュールは、つぎのようなものであった。

<岡本哲彦教授訪中日程>

- 9月25日(木) 大阪国際空港発→北京(JL)
- 26日(金) 北京大学物理学部にて講演
- 27日(土) 中国科学院物理研究所訪問、学术交流
- 28日(日) 北京市内遊覧、参観
- 29日(月) 北京発→西安(航空機)
- 30日(火) 史跡、博物館等見学、農村参観
- 10月1日(水) 西北大学訪問、学术交流
- 2日(木) 西安発→武漢(航空機)
- 3日(金) 華中工学院訪問(院長表敬)
- 4日(土) 華中工学院物理学部にて講演

5日(日) 武漢→上海(航空機)

6日(月) 復旦大学との学术交流協定調印式に参列、上海遊覧

7日(火) 復旦大学物理学部にて記念講演

8日(水) 上海発→大阪(CA)

日程の中に西安(古都長安)を含めたのは、「古いものを見たい」という先生の希望を容れたからであり、最後を上海にしたのは、折も折、わが大学と復旦大学との交流成り、沖原学長のたつての要請でその調印式に列席するためであった。

紺碧の北京、広い空

北京に到着した先生は、北京大学の彭家声副学長(当時)を始め物理学部の先生たちの出迎えを受け、公用車で北京大学に向い、そこの外賓招待所に旅装を解いた。「北京の印象はどうか」と彭副学長が聞くと、先生は「広いですね。広い」と言われ、空の青さをじいっと見つめておられた。「北京秋天」という言葉が示すように、また、マルコポーロが“世界の天堂”と絶賛したように、9月から10月にかけての北京の美しさはたとえようのないものである。私は素晴らしい時期に先生をお連れして、本当に良かったと思わずにはいられなかった。

加えて、「広い」のは空の青さだけではなかった。北京大学キャンパスの宏大さは、森と見まごう緑の深さとあいまって、日本のいかなる大学の比ではなく、先生はこれに賛嘆と羨望を禁じ得ないようであった。

翌日、先生は物理学部を訪問され、研究室・教室を視察されるとともに、物理主任を初め物理系大学院担当の先生がたと親しく懇談された後、「希土類金属間化合物の磁性について」と題する講演をされた。私は専門外でもあり、他に所用もあったのでこれには出席しなかったが、大学院生を含めて物理系の一群の人びとは先生と同領域の研究をしているとのことで、先生の講演は多大な関心をもって聴かれた、と聞いた。先生は決して流暢とはいえないが、正確な英語でお話された。私はこの日の出席者のリストを彭副学長からもらって持っているのであるが、

どこへしまいこんだのか、いまだどうしても探せないでいる。ただ、先生の講演を聴いた人の中に、昨年1月の民主化政変で「中国のサハロフ」とされ、中国科学技術大学の副学長を解任された物理学者方励之教授の夫人がいたことは確かである。夫人もまた北京大学の物理教授であった。

三日目、中国科学院物理研究所に行かれた。中国の学術体制は、大学と科学院の二本建てになっており、科学院は教育を離れて研究のみを主眼としたいいわゆる Academy であるが、先生はここで中国の物理研究の現状を含めて多大な収穫を得たはずである。「中国物理のトップクラスの人たちに会った」、先生はこう言われ喜ばれていた。



北京最終日は日曜日でもあり、先生は万里の長城をはじめ故宫、天壇など古い史跡を遊覧され、古都の秋を十二分に楽しまれた。その夜は彭副学長の自宅で歓送会が催されたが、先生は上機嫌であった。中国では、それがいかなる地位の人であれ、夕食は大体が男が作るのが習わしで、この夜も水餃子をはじめ各種の肉料理、魚料理など豪華なテーブルが副学長の手で作られ、青島ビールと白酒で先生は心地よく酔われた。北京留学中の私の研究室の久留島幹夫君と、同じく北京大学在学中の私の娘もかけつけ、宴は深更に及んだ。先生は私の娘に向かって「僕は女の子がいなくて、娘を欲しいといつも思うのですよ」と、ちょっぴり胸の内を覗かせ、「お父さんの志を継ぐように頑張ってください」と励ましてくれた。そればかりか、別れしな“お小遣い”をくださったのである。

訃報以後、娘は「あの夜の先生を思うと涙が出て

なりません」と手紙に書いてきた。私も同じである。

思わぬハプニング 大同へ

ところで、旅には思いがけぬことが付き物である。中国を旅行した人は分ると思うのだが、中国の官僚主義が派生させる業務面での非効率性、サービス面の悪さは、情報手段の不備もあいまって旅行者を悩ませることが多い。この場合もそうで、9月29日、西安へ行くために指定された旅行社へ航空券を取りに行ったところ、「岡本も小林も予約されていない」というのである。「そんなことはない。日本でははっきりと予約し、ほら、この通り予約券、予約番号も持っているではないか」と言っても、答えは「ない」の一点張りである。長時間、押問答をくり返したが、一向にらちがあかない。時間は過ぎるばかりである。ついにあきらめて、「どこか別のところへ行こう」ということになった。

しかし、「別のところ」と思っても、日本のようにすぐに融通の利く社会ではないのである。旅行社の話では、今日、明日の切符はすでに売切れたという。とすれば、残された手段は駅に並ぶしかない。私は久留島君を北京駅に走らせ、「どこでもよい。2日以内に帰れるところを買ってくれ」と頼んだ。何時間ねばったのか、中国語に堪能な久留島君の奮闘で入手した二枚の切符は、大同行きであった。そして、大同まで10時間……私は棄権し、先生のお供は久留島君に代ってもらった。(あとになってだが、切符は確かに予約されており、旅行社はミスを認め謝罪してきた)。

西安変じて大同は、しかし、先生にとって大変に良かったらしい。周知のように、大同は雲崗石窟で知られる世界的に有名な、中国最大の仏跡寺院の所在地である。この仏跡は東西1kmにわたって53の洞窟から成っており、その中に大は17mのものから小は数mmのものまで約5万1000体の仏像が刻まれている。雲崗石窟は魏の時代に作られたから、これら石仏たちは約1500年間、風雪に堪えてきたことになり、中国文化の悠久さを示す「古いもの」の代表の一つであるといつてよい。先生が満足したのも当然であった。以下は、久留島君の話であるが、先生は石窟の壮大さと造形の見事に深く感動し、いくつもの石窟内に入って仔細にこれを観賞されたそうである。思わぬ拾い物であった。

大同に二泊して帰京した二人は、さすがに疲れたと見え、先生は夜遅くまで帰りを待っていた私のこ

とも忘れて、すぐに自室に閉じこもり寝込まれてしまった。そして翌朝、私が北京を離れる時間になっても起きられなかった。私の予定は当初からこの日、先生と別れて重慶に飛ぶことになっていたの、上海での再会を約したメモを残して、北京を発った。先生のつぎの予定地武漢では、華中工学院副教授彭文生さんがすべてお世話してくれる筈であった。だが、心配なので久留島君に再び同行をお願いした。

華中工学院での学術交流

武漢は長江中流に位置する景勝の地である。唐代の詩人李白の詩で有名な黄鶴楼があり、杭州の西湖に対するに東湖があり、『三国志』の舞台の一つでもある。近代に入っては、孫文の辛亥革命はこの地から発し、日中戦争の初期、“武漢攻略戦”の名の日本軍の猛攻撃はこの地の人びとを多数犠牲にした。



だが、前出の彭文生さんを含めて中国の人は、戦争の傷痕について少しも語ろうとしない。反対に、武漢の人は日本との友好を熱望しており、武漢大学と並ぶ有名校である華中工学院が1983年10月、広島大学と学術交流協定を結んだのも、日中関係の重要性を深く認識していたからにはかならない。彭さんは私の友人であり、かつて2年間、西条の工学部で研修を積まれた。岡本先生とは初対面であったが、先生の印象と武漢での学術交流のもようを、つぎのように書いてきている。

「文男学兄：

(前略) 岡本先生とは初対面でしたが、清潔な人柄と明るくざっくばらんな態度に好感を持ちました。工学部の先生は多数お見えになるのですが、

総合科学部からは学兄を除いては岡本先生が初めて本校を訪問されたので、王院長以下、本校は先生を熱烈に歓迎しました。(中略)

岡本先生にはく希土類金属間化合物の磁性>に関して、主として物理系の院生を対象に講演していただきました。私が通訳を予定していましたが、先生は原稿を用意されており、英語でお話されました。物理系以外の人も何人か出席していました。(中略) 王院長との懇談では、岡本先生は総合科学部の理念を熱っぽく語られ、学際研究の必要性と研究の国際化を力説されました。

本校も理科系総合大学から文科系を含めた総合大学へと改組、発展を計画中です。岡本先生のお話は王院長以下本校の指導陣に大きな影響をあたえたと思います。(後略) [原文中国語]

1986年10月29日

華中工学院もまた広い。研究・教育環境も抜群である。あとの話だが、上海で再会した先生は、「いや、実に清潔だ。研究室も教室もゴミ一つ落ちていないし、まず静かなことに驚いた。あれはどうなっているのかね」と語られたが、さもありません。廊下を走っている学生を見ましたか」と私。「いや、いない。そんなものいるわけないだろう、ワアハハ……」。二人は期せずして、総合科学部の汚なさや騒然さを思い浮べたのである。先生は彭さんに案内され、黄鶴楼、東湖を回り、武漢長江大橋を見て、陶然としたという。

彭さんにはお世話になった。彼は先生の悲報をどんな思いで聞いたであろうか。

先生の中国イメージ

さて、私は10月5日、武漢から来た先生、大阪から飛来した沖原学長、岩本国際主幹と上海で合流した。宿舎は復旦大学招待所で、学長と私は2階に、先生は3階に部屋を取った。上海における日程と行動については、先生ご自身が詳しく筆にされているので(『学内通信』No.252、昭和61年12月20日号)、ここではすべて省く。私が最後に述べたいのは、先生の中国観である。

先生は冷徹な科学者である反面、明朗で温かく優しい人柄であったことは、衆目の一致するところである。中国でも、先生はそうした態度で一貫されたが、私の見るところ、先生は中国に深く魅せられたようである。滞在中も、また帰国後も、先生はしばしば中国の大きさと人間味の豊かさに言及されたが、

そこにはいつも言葉にならぬ感動がこめられていたように思う。いいかえれば、それは高い文明への畏敬ではなかったかと想像される。現在の中国には、専門の物理学の水準にしても、見聞し得る限りでの経済状況にしても、先生としては問題だと思われたものは多々あったに違いない。



しかし、先生は何を見ても、また、普通の日本人であればすぐに中国の「後進性」を指摘したくなるような事象に遭遇してすら「日本もつい最近までこうだったよ」と言い、「時間の単位、歴史のスケールが違うのだね」と平然とされていた。いやむしろ、先生は追われる身の日本にすくなくならず危機感を持たれたのではなかったか、と想像する。「日中友好の大切さがよく分った。中国と仲良くしていかなければ……」とも語っておられた。先生が中国人学者の受入れに異常なほどの熱心さを示され、蘇徳昌さんを中国語講座に迎えたのも、その表れではなかったか。私はいま、先生の中国における悠々たる態度を、満腔の敬愛と、限りない懐しさをもって思い出す。そして、帰路の機上での一言をも……。

「楽しかった。腹一杯食べた。だがね。心残りは荒谷君を中国に來させられなかったことだよ。小林さん、また頼むね」

荒谷君とは、この年3月、定年退官された荒谷孝昭教授のことである。荒谷先生は薬草学の権威であり、在職中に薬草のメッカ中国雲南に出張させたいというのが、岡本先生の希望だったのである。

こんな時にまで、先生は他の人を思いやる心の人であった。先生の魂よ、安かれ！

(1988年2月5日)

退官の言葉

山田 浩



34年間大ひとすじで、3月末定年を迎える。思い出深い出来事といえば、大学紛争から総合科学部の創設、大学院博士課程の社会学研究科（国際社会論専攻）の発足、それに岡本学部長刺殺事件だが、それらについては別の機会に感想を述べた。そこでここでは、そのほかのいささか私的な感慨について書き記すことにしたい。

総合科学部は、もう忘れ去られてしまっているが私の母校旧制広島高等学校の後継校である。時代がまったくの様変りで、旧広高の昔を偲ぶよすがもないが、その追憶は老いとともにますます鮮烈の度を加えるようだ。いまだに付き合っている多くの友人に恵まれたし、そこでは知識を教わったというよりも、「人間」を学んだとの思いが深い。

私の最初の希望は、旧制高校の先生になることだった。私も名物教授の端くれに入れてもらい、教え子に囲まれた老後を夢想した。毎年出席する同窓会の新年互礼会で、今年で米寿を迎えられたN先生のそれが癖の長々しい、例の「3世紀にわたり生きるのだ」という、乾杯の前口上を聞いた。「自分は本籍を広島市に移し、ここで最後を迎える」——旧広高の創設から最後まで勤め上げられた老先生の果てるともない繰り言に耳を傾けながら、「そうだ。これが私の夢だったのだ」との思いを改めて新たにした。

旧制高校は廃止されて、私の夢も潰えた。だが、心のなかではつねに同窓会の広大支部長だったし、一貫して後継校のこの学部にお世話になり、そこで定年を迎えたことに満足感をいただく。広大を去るに当り、この「心の総合科学部」にも、忘れずに別れを告げることにしたい。

御専門は国際関係論です。九州大学法文学部・経済学部で学ばれた後、九州大学でしばらく研究を続けておられました。昭和28年に広島大学皆実分校に移られ、以後今日に至るまで核抑止戦略と政治学について研究と教育を進めて来られました。また昭和57年から61年まで広島大学評議員を務められ、大学運営の重責を果たされました。

4 から 7 へ ～ 変わるといふこと～

編集 部

「闘ってみんと 変われんじゃろ」——入学直後なんとなく私が思った言葉です。しかし、今迄の大学生活の中で、私の心の中で、大きな位置を占めている言葉のように思えます。

変わるということは、簡単なようで難しいことのように思えます。今の人達は、変わるということ、変えるということに躊躇する風潮があるように思えるし、時に、あたり前とされていることに対してはそのような傾向が強いように思えます。このような中で、新しい大学生活をおくっていて、帰省して旧友に会ったりした時も「全然変わってないねえ」なんて言われることもよくあると思います。

けれども、総合科学部は昨年、大きく変わったと思います。新しいコース、外国語コースの一年目であり、新しいコース編成が導入された年でもあります。そして、今思っても悲しい事件、学部長刺殺事件により、総科の教官方も学生も、色々と考え、意識も変わったと思います。このような意味で、昨年は総科にとって、節目となるような年だと私は思います。そして、このように刺激が多い中にいる私達は、自由に変わるという可能性が多くなるという意味で、幸せともいえると思うのです。

もちろん、変わるということは、良い方向ばかりではありません。悪い方向へ変わるということもあります。しかし、変わるということなしに、いつまでも今のままでは、そこに進歩というものはなく、何も生まれてはきません。

去年の夏、ある友人と酒を飲んでいたとき、その友人が「今の僕は、何をやるにしても先のことばかり考えてしまって、その先のことが見えてこないと行動にうつせない。」とっていました。しかし、私は、「何かいいと思ったら、まず行動したほうがいい。」と思っています。このようなことは、人それぞれ違うと思いますが、私は、大学生のうち、いくらでも後戻りできるし、その失敗も決してムダとはならないと思うので、先のことを考えるのは二

の次にして、どんどん行動していった方がいいと思います。

闘ってみんと…、人によって、「闘う」という言葉のとらえ方は違うと思います。今の私にとって、「闘う」ということは、権力に反発することでもなく、猪突猛進的に突っ走ることでもありません。それは、いいと思ったことを、まず行動にうつしてみることです。

総合科学部は昨年、4コース編成から7コース編成に変わりました。そして、その7コースが実際に動きはじめるのは新年度からです。そして、総科がどのように変わっていくか、それは私達学生次第です。

(文責 福永 弘樹)

大学・大学生と人生雑感

自然環境研究コース 助手 海堀 正博

大学は高校までのいわゆる学校とは異なり、勉強するだけではなく、なんらかの研究をするところがあります。「大学で行われるべきものは、授業ではなくて講義と研究なのである」と私は常々考えています。与えられるものではなくて、学生の方から積極的に自分の身になるように獲得していくものでなければならぬし、大学生になったからには、何か自分の興味を持てるものをさがして前向きに研究していったらいいし、大学もまたそういった環境を創りだして行かなければならないと思います。高校までの生徒という立場から、大人として扱われるべき、大学での学生という立場への大きな移り変わりを、一体何人の人が自覚しているのでしょうか。

大学生という立場は、それを体験したくてもできなかった人たちに比べるとやはり恵まれていると言えましょう。最も感受性の豊かな時期に、数々の自由が与えられているのです。思いきり多くの本を読もう。思いきり多くの音楽を聞こう。思いきり多くの人と話そう。思いきり多くの世界を見よう。そして思いきり多くのことについて考えよう。このような貴重な時間を大学生は持つことができるのです。

ところが、大学院生となると、また話が変わってきます。この立場では、もはや一般的な知識を拡充することよりも、自分の専門とする分野の研究をより深めることに力点が置かれなければなりません。何事にも厳しく対処し、また対処されますので、多くの人が大学院生という立場に苦しみさえ感じます。ふつうの大学生のように遊んではおれないのです。だから、研究をはじめ、人生に対しても、種々の疑問や悩みがわきあがってくるようです。

しかし、諸君、「時間を浪費することを恐れすぎではないけない」（「チボ一家の人々」より）。

人生はくねくねと曲がりくねった道のようなものだと思います。むだに見えた時間が人間の幅をでか

くすることも事実です。人生において、本当に良かったのか悪かったのかは、後になってみないとわからない場合が多いものです。常に希望を抱きながら、たとえ回り道のような気がしても、あせらず、ゆっくりでも、自分の納得する道を歩むことだと思います。どうぞ、有意義な学生生活を送られますように。

第一印象 一広島一

地域文化コース（志望） 向井 かすみ

時折、高校時代の友人たちが広島見物を兼ねて私の下宿にころがりこむ。もちろん私はボランティアの観光ガイド。彼らにふり回されるのか、それとも私がふり回すのか、とにかく広島中一緒に歩き回るわけだ。彼らが目新しいものに見えたり、受験で初めて広島にやってきたときの自分を思い出してしまう。特に新幹線口に行くたび思い出し笑いがこみ上げてくる。

「へー、これが広島の前か。案内田舎だな」初めて広島の前を目にした私の素直な感想である。新幹線のホームを降りて、駅の外に広がる景色—そこが私の初めてみた“広島”だった。向かって右には大きな白いホテルがあり、すぐ目の前は山…。「駅前割には静かなな。」そこが“駅裏”などとは夢にも思わなかった。挙句の果てに「原爆ドームはどこなんだろ？」と牛田の山々を見渡して頭をひねる始末。—もちろん、十数分後には本当の“表玄関”にお目にかかったわけだが、最初見た景色の印象があまりに強すぎたのか、私はいまだに「駅前」というとなぜかあの緑の山々を思い浮かべてしまうのである。そしてその風景の中には、大荷物をもってポーッと立っている自分がいつも必ずいる。必ず。

今年もまたたくさんの受験生が広島にやってくるだろう。ひょっとすると私のようにアホな体験をする奴だっているかもしれない。そう考えると妙に楽しい。平和公園・路面電車・本通り……それ以外の



“広島”があったっていいじゃないか。

—また春休みは観光ガイドにされそうな私である。
“駅裏事件”は当分わすれそうにもない。

推薦状の中の一語「レジリエント」

外国語コース教授 田村 一郎

もう二昔も前の話である。私が British Council の留学生試験に応募した頃のことである。推薦状が三通必要とのことで、一通を同僚の英国人講師に無理矢理頼みこんだ。いかにも英国人らしい、美辞麗句のない文であったが、肝心と思える部分に、まことに恥しい話だが、私に未知の単語が一つあった。文脈からして、ともかく褒めてもらっているはずだが、その‘レジリエント’と言う音には、どこか不快な響きがこもるように思えた。

何しろ相手が、個性の強い英国人中にあってさえ ‘eccentric’ として有名な小説家である。有名な George Moore と同姓同名とはいえ、いつも会えば悪口をたたかわせ合う仲の相手である。致命的な悪口を言われても仕方ないと観念のホゾを決めて、英和辞典を開いて、‘resilient’ が「物ならば弾

性、弾力があり、人間ならば落胆、病気、困難などから立ち直りが早い、‘cheerful’ な」と言う意味である事を知り、正直ホッとした。そうして、一年間異文化の中で過ごす留学生を推薦する言葉として、最も有効な一言を添えてくれた彼の友情に感謝した。

だが、考えてみると、これは私への彼の精一杯の皮肉であったのかも知れなかった。鋭くとき澄まされた語感を持つ彼は、私の悪口の一語一語が心に深い痛手をおわせていたのに、英語の文化にも言葉にも鈍感な私は、厚顔無恥にも、微妙な皮肉も悪口も一向に通じないでケロツとしていたのである。だから彼は私がいつも深手から立ち直ると勘違いしていたのかも知れないのである。

だが、この一語は、英国のドンヨリと重く垂れこめる雲の長い冬を過ごす身となってみて、まるで私

一人生訓のごとき力を持ちはじめた。「盆がはようくうーりゃー、はよもーどーるー」と、いつしか沈む哀調が心に浮ぶとき、私はモアー氏が推薦してくれた弾力と快活の水準に達しなければと、母から口伝えにならったジャパニーズ・イングリッシュの「イツァロングウェー…」の歌を口唇にし、第一次大戦の英国出征兵士然と肩を張って大学のある丘へ登って行った。この友情と皮肉の一語が、私の一生の努力目標となった。



インドへ

環境科学コース 3年 松熊 訓子

あるインド通の人がいった。

少くとも、インドへ旅行にくる人は、美味しい食物を食べようと思って来るのでもない。買物だって、安いけれど、ヨーロッパやアメリカでする買物とは全く性質がちがう。それじゃ、彼等は何をしに来るのか、と考えると、やはりインドに何かを求めてきているんですよ。何かっていうのが何だかわからない。わからないから何かなのです。一度インドに来れば、その何かの手ざわりを感じ、もう少ししたしかめたくて、また来たくなる……そんなことじゃないですか。

ここまで読めば、今、私が一番したいことがわかったでしょう。そう、「インドへ」行きたいのです。行ってどこを観光したいというのではなく、ただ漫然と、のんびり、気ままにインドに流されたいのです。でも同時に、心の中ではインドに行くことを恐れている、麻薬の世界にでも足をふみ入れるようなこわさを感じているのです。けれども人間というのは、一旦好きになると、見るもの聞くもの、何でもが良く思えるもので、バザールでの値切りながらの買物は、してやられることの方が多いと聞いても、不思議に腹がたたないし、宿に、上水と下水が一緒になっているところもあると聞いても、さすがインドだなあと感じいってしまうのです。インドの大きな自然の中には、失いつつある、人間の本来の姿があるような気がしてなりません。生存競争に身をやつし、立身出世にしのぎを削る虚しい生き方と、はだして、大地にしっかりと根づいている生き方とどちらが人間らしいか。

インドは、一度でもうこりごりという人と、一度行ったら、何度でも訪れたくなる人の二種類に分かれるとよく聞きます。一体、私はどちらなのだろう。

インドに行きたいと思っているあなた、迷わずひとこと声をかけて下さい。

“ぼこ”
箱



“飛翔箱”へ投稿のお願い

編集部

学部広報紙飛翔では、“飛翔箱”なる、自由投稿スペースを設けております。教職員—学生を問わず、総合科学部の方なら誰でも自由に投稿していただけるオープンな場として活用していただきたいと願っております。一言いいたい、誰かに聞いてもらいたいという思いをお持ちの方、学部の問題点から、日常の一コマまで、幅広くお待ちしております。

(原稿は厚生補導係または、学生編集委員までお出し下さい。)

前号 (No.33) のお詫びと訂正

飛翔33号におきまして、教官の方々の御名前及び所属に誤りがございました。失礼をお詫びいたしますと同時に、誤りを訂正させていただきます。

誤

正

目次ページ 阿部 剛

安部 剛

P.21 19行目 GOIDSBURY

GOLDSBURY

P.30 39行目 小川泰生 (ドイツ語講師)

小川泰生 (中国語講師)

饒舌

テレビ電話が、大学生協で「学生生活の必需品！今なら20% off」なんてことになるのは、もう少し先の話のようである。「声」だけのコミュニケーションが暫く続くというわけだ。

自分の生活に必要なモノとして電話が入り込み始めた頃には、世の中の方にもかなり普及していたので、電話を通じた会話への抵抗感など全く感じないまま今日に至っている。

電話が遊び道具になる程の“電話っ子”ではなかった。長電話を覚えたのは、中学生の頃だったように記憶している。高校時代に3時間の壁が頻繁に突破されるようになると、後は簡単。「たかが」2時間の電話には動じなくなる。「電話で話すのはどうも苦手で」という御仁にたまたまお目にかかることもあるが、昨今の大学生なんてこんなものではあるまいか。

電話が、重要度の高い、急ぎの情報を伝達するためのものと思われていた時代は遙か後方に飛び去ってしまった。「情報産業」の進展に伴い、次から次に新しい可能性が生み出されていく。私達はその後を追いかけるような形で、電話との付き合い方を変えてきた。

生活にどう電話を組み入れるかということは、人とどうコミュニケーションを行うかということも深い関わりを持っている。

“声”だけのコミュニケーション——だから電話中の沈黙は耐え難いものとなる。私達は喋る。とにかく喋る。ひとしきり話し終わると、今度は相手の言葉尻をとらえてでも次なる話題を求め、何とか会話を成り立たせようとするのである。無論、普段電話で他愛のない会話を繰り返している時に、このようなことを意識しているわけではないのだが。

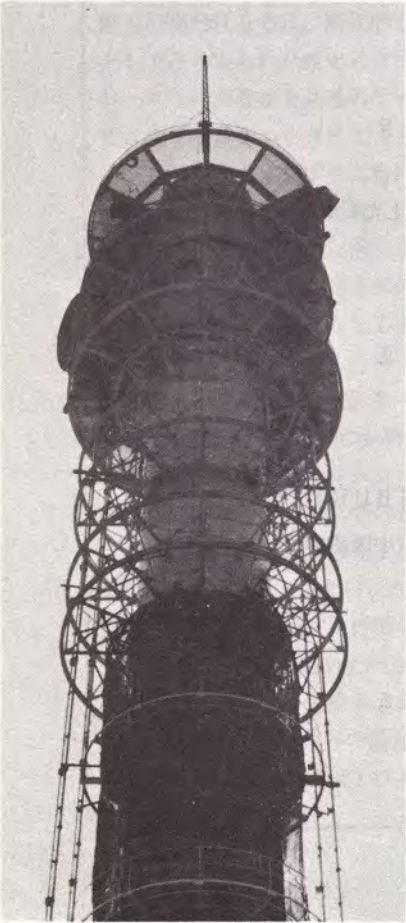
善・悪ではない、と思う。電話がこれほど普及し、日々新たな電話の利用法が案出されていることを思えば、それに対してどうこう言うより、たぶん上手く使った方がいい。

先日、遅ればせながら「留守番電話」を購入した。

新しい電話の“TRR…”がやっぱり嬉しくて、かかってくる度に饒舌となっていった私——なのである。

(文責 藤本 貴子)

写真は第二電電株式会社のアンテナ塔。4月末から市外電話のサービスを開始する。



編 集 後 記

我々の存在基盤である学部は、そして大学は、構成員全員で『よりよくしていく』ものです。何をよくするのか？大学にあっては、その共通項は“純良な学問を求めること”からのみ出てきます。これを学生と俱に共有できるか？より多くの人達の参加でこれからの飛翔が育つか否かのカギだと思います。

(広報委員 渡辺 一雄)

物事の本質と実態を正確に理解することが各自の判断の基礎として不可欠であり、分かったような気になる(させられる)ことほど危険なことはない。

「飛翔」は総合科学部の実態を伝える使命を担っているが、奇抜性や刺激性を売り物にしていないものを読むには多少の覚悟と努力を必要とする。こんなことが、「飛翔」の編集に少しだけ関与した者の「当事者意識」として残りました。図らずも、これが広島大学における最後の教訓にもなっていました。

(広報委員 長谷川 正之)

学生編集委員の皆様、御苦勞様でした。

私にとっては、「飛翔」の編集過程を知る良い機会でした。刷り上がりを楽しみにしています。

(広報委員 楠戸 一彦)

「飛翔」の春号を手取る頃は、いつもながら学年末のあわただしい季節になります。卒業式が済めば入学式とたてつづけに過ぎてゆきます。

新生生にとって「飛翔」の初印象はいかがでしょうか。入学時の興奮がやがて冷めたころ、新ためて手にとるとこの紙面から「総科」が次第に見えてくると思うのですが、どうでしょうか。

(厚生補導係 宮城 勝彦)

“Chocolate”という単語を「チョコラッテ」と発音してしまう最近の私であった。

(伊藤 多喜子)

関係ないけど文章を書くのは好きじゃない。関係ないけど時間が経つのは早すぎる。関係ないけど…。

(海住 隆雄)

MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい・MACはいい

(桑原 秀行)

平凡と非凡とをはかりにかけてみたらどちらも私の中にあることに気づいて驚く'88。

(下野 寿子)

後期では復活しようと思っていたが、またとめどもなく解体しつつある。現在死亡した単位は幾つか。これ以上は落としたいくない。

(戸敷 聡)

今回、飛翔の仕事はほとんどしなかった。しかし、鬼の二月だった。

(布川 克彦)

いろいろなことがあたまのなかでぐちゃぐちゃになってぐるぐるまわって、でもわたしにはほんしゅとうたがあるからいいのさ！

(福永 弘樹)

編集後記

うちのネコは、私より先に布団に入り、布団を温めてくれるいい奴です。

(矢野 泉)

私は minority の bitterness of hidden sorrow を知った。

(内藤 千恵美)

言いたいこと一杯あるけどさ、黙ってるよ。言い出すときりないもんね。でも一言だけ叫ばしておくれ——ガアッ！——

(青山 幸樹)

おわったー！と言いたいのでありますが、私は今割りつけの真っ最中。いつの日にかきっと、すべて仕事がすんでから編集後記を書きたい、と祈りつつ最後の編集後記が回ってきたのであった。この号が発刊される頃には、私はダブリンの空の下、晴れてるといいな。

(小笠原 弘明)

いろんな人に、いっぱい迷惑をかけてしまって、ごめんなさい。ということで、皆さんパリの凱旋門で会いましょう。

(新田 明美)

何事につけ、三年というのは一つの区切りのような気がします。いろんなことがあったけど、この三年間、私を支えてくれた全ての人達に感謝しています。ありがとう、そしてこれからもどうぞよろしく。まだ“さよなら”は言いません。

(鈴木 美諸)

「戯れる」ことと「狎れ合う」こと、やっぱり区別したいよね、と思ってしまう私に、一週間程、絡みつくような日常をかわせる亜空間のホテルを紹介していただけないでしょうか？

(藤本 貴子)

'88 総科カレンダー(前期)

編集部

総科生はよく勉強します(?)。総科生はよく遊びます。行事がいっぱいの総科の1年間、新入生は積極的にこれらの行事に参加しましょう。とにもかくにも総合科学部へようこそ。

<4月>

○入学式(8日)

おめでとう。うれしはずかし、あなたも今日から総科生。

○新入生ガイダンス(9日~12日)

「総科って何やるどころ?」答えられない君は勿論、答えられると思っている君も、教官の話真剣に聞きましょう。何事も初めが肝心です。

○2年生コース決定・発表(9日又は10日)

7コースでの新しいスタートです。安心する人、涙する人様々。新入生にはあと1年あります。じっくり考えましょう。

○前期聴講受付(13日~26日)

時間割は自分で組みます。わからないことは最寄りの優しい先輩に尋ねてみましょう。いろいろ参考になるお話が聞けるでしょう。学務への提出、確認も忘れずに。

※各種奨学金、授業料免除の手続きもこの時期。

○新歓コンパ

新入生歓迎の楽しい宴会。病院に運ばれる人もいるというのは、ただの噂ではないゾ。肩組んで“安芸の国”歌えば、これで君も立派な総科生!

○オリエンテーションキャンプ(23日・24日)

縦のつながり、横のつながりを深めるチャンス。友達をたくさん作りましょう。ついでに彼女や彼氏ができてしまうこともあります。打ち上げまで体力を残しておきましょう。

<5月>



この時期、1にコンパ、2にコンパ、3、4がなく5にコンパ。体と財布の中身に気をつけて過ごして下さい。

○4年生教育実習(5日~18日)

広大附属福山中・高等学校で行ないます。教職を取りたいと思う人は、教育専門科目(2年から)を取りましょう。

○春期ソフトボール大会

総科行事の決定版!全員参加目標です。同じチームの女の子達がお弁当作ってくれるかも……。この打ち上げがまた恐ろしい。



<6月>

○家庭教師ガイダンス

大学で斡旋を受けたい人は必ず参加しましょう。

○6月祭

森戸道路にあふれる露店。去年の総科1年生はお好み焼とかち割りを売りました。今年も一旗揚げてみる?

○総科創立記念日(7日)

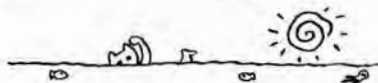
今年で14年目を迎えました。残念ながら、休みにはなりません。

<7月・8月>

○夏休み(7月11日~9月4日)

久し振りの母の味求めて故郷に急ぐも良し、バイトに励むも良し、免許も取るも良し、ひたすら遊ぶも良し。全て君次第。でも、9月には、アレが待ちかまえていることをお忘れなく。

<9月>



○前期試験

勉強は学生の本業なのです。知ってましたか? コピー機に、何故か人の群がる季節です。

<10月>

○秋休み(1日~14日)

いわゆる試験休暇。これぞ大学生の特権(?)。ゆっくり過ごして、疲れを癒して下さい。

後表紙ウラへ続く